

学校通信

学校生活における大切なお知らせです

8

2024 AUG.

第 255 号

学校長からのメッセージ

◆A 子さんのこと

「A 子には発達障害があり“弱い立場”だから守られなければならない子です。それなのに B さんは、A 子に嫌なことばかりします。なんとかしてほしい」と A 子さんのお母様との話です。「実は、B さんも“弱い立場”の生徒なのです。」「“弱い立場”になる要因は様々ですが、いじめを受けてきた経験をもつ生徒の中には、人間関係は『いじめる側』か『いじめられる側』か、どちらかしかないと思っている人がいます。そのため、『いじめられる側』になる前に優位な立場『いじめる側』になろうとすることがあります。」この話にお母様は大変驚いておられました。勿論、B さんの行いを正当化したわけではありません。時間はかかりますが、B さん自身がそのことに気づき、A 子さんと良い人間関係を築けるよう私たちは取り組んでいます。

◆生徒理解のために

人は、大なり小なり何らかのトラウマ（精神的外傷）を抱えていると思います。虐待や事故、家族や友人の死、いじめなどによって精神的ダメージを受け、大きなトラウマを抱えることもあります。すると、心・身体・行動に影響が表れて、その場に合った適切な言動が出来なくなる人もいます。

生徒たちの言動を見聞きする時、表面的なものだけを見るのではなく、「なぜこの生徒はこの言葉を口にしたのか？」「どうしてこのような行動をとったのか？」と、背景にあるものに思いをめぐらせます。さらに「この生徒はトラウマがあるのかもしれない」と、深く考えることで、生徒に寄り添った対応ができると考えます。この考え方は、「トラウマ・インフォームドケア」とも言われ、近年、生徒たちと接する中において特に大切だと感じています。

生徒たちが心に受けた傷、トラウマなどは学校だけで補え切れるものではありませんが、私たちは心して生徒たちと接し、良質な出会いになるよう心掛けています。そして、安心できる場を提供することで生徒たちが自己肯定感を持ち、自分らしくふるまえることが私たちの願いです。

(校長 鍛治田 千文)

「主が民の傷を包み 重い打ち傷をいやされる日 月の光は太陽の光となり
太陽の光は七倍になり 七つの日の光となる」：イザヤ書 30 章 26 節





今月の聖句

「そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。群集は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。」

(マタイによる福音書 20 章 31 節)

イエスと大勢の群集がエルサレムに向かっている時でした。道端に座っていた二人の盲人たちが、イエスがお通りだと聞いて叫びだしました。普段は静かに道端に座っていた二人です。そこに彼らが居たことすら知らない人たちもいたでしょう。そんな彼らが、イエスが近くを通過おられるということを知った時、大声で叫びだしたのです。救いを求めて、癒しを求めて……それは彼らの命がけの叫びでした。

ところが、そんな彼らの叫びを、大勢の群集は黙らせようとしたのです。命がけで叫ぶ彼らを無理やりに居ないことにしてしまおうとしたのです。まるで、臭いものに蓋をするかのように。それはまるで私たちの心の中のようなのです。自分でも見たくない部分から私たちは目を逸らしてしまうことが多いです。でも、そこには確かに救いを求めて時々大きな声で叫びだす自分がいるのです。その部分に、イエスは目を留めてくださり、救いと癒しを与えてくださるのです。

